

大謝野品子沢

源氏物語(才三卷)

與謝野晶子譯

源氏物語

第三卷



世界文學選書

三笠書房

世界文學選書 6

源氏物語

第三卷

¥ 200

昭和二十四年九月十日
昭和二十四年十月五日
印刷
昭和二十四年十月十日
再版發行

發行所

株式會社 三笠書房

東京都千代田區神田保町二ノ二〇

電話九段六五〇四番
振替東京二〇九六番

發行者 廣瀬文子

東京都千代田區神田保町二

印刷者 鈴木二郎

東京都千代田區神田三崎町二ノ一

譯者 與謝野晶子

旭印刷工業株式會社 印刷・徳住製本所 製本

第三卷 目次

雲 くも 隠 かく れ……………	まぼろし……………	御 み 法 のり ……………	夕 ゆふ 霧 きり 二……………	夕 ゆふ 霧 きり 一……………	鈴 すず 蟲 むし ……………	横 よこ 笛 ふえ ……………	柏 かしは 木 き ……………	若 わ 菜 な 下……………	若 わ 菜 な 上 （うづき） ……………
1011	一八	一七	一六	一〇	一三	一〇	六	三	二

總あ 椎し 橋は 竹たけ 紅こう 毛け

が

角かく 本もと 姫ひめ 河かは 梅うめ 宮みや

二五

二六

二四

二九

三〇

三三

源氏物語 第三卷

若菜 上 つづき

東宮へ上つておいでになる桐壺の方は退出を長く東宮がお許しにならぬので、姫君時代の自由が戀しく思はれる若い心にはこれを苦しくばかり思ふのであつた。夏頃になつては健康も勝れなくなつたのであるが、なほも歸るお許しがないので困つてゐた。これは妊娠であつたのである。まだ十四五の小さい人であつたから、この徴候を見てたれもたれも危険がつた。やつとこのことでお許しがさがつて歸邸することになつた。女三の宮のおいでになる寢殿の東側になつた座敷の方に桐壺の方の一時の住居が設けられたのである。明石夫人も共に六條院へ歸つた。光る未來のある桐壺の方の身に添つて進退する實母夫人は幸運に恵まれた人と見えた。紫夫人はそちらへ行つて桐壺の方に逢はうとして、

「このついでに中の戸を通りまして姫宮へ御挨拶を致しませう。前からさう思つてゐたのですが機會がなかつたのですもの。わざわざ伺ふのもきまりが悪かつたのですが、こんな時だと自然なことに見えていいと思ひます。」

と院へ御相談をした。院は微笑をされながら、

「結構ですよ。まだ子供なのですから、よくいろんなことを教へてお上げなさい。」

と御同意を遊ばされた。宮様よりも明石夫人といふ聰明な女に逢ふことで夫人は晴れがましく思ひ、髪も洗ひ、粧ひに念を入れた女王の美はこれに準じてよい人もないであらうと思はれた。

院は宮の方へおいでになつて、

「今日の夕方對の方にゐる人が漱景舎を訪ねに來る序でにここへも來て、貴女と御交際の道を開きたい様に云つてゐましたから、お許しになつて話して御覽なさい。善良な性質の人ですよ。まだ若若しくてあなたの遊び相手も出來さうですよ。」とお語りになつた。

「恥づかしいでせうね。どんなお話をすればいいのでせうね。」

と大やうに宮は云つて居られる。

「人にする返辭は先方の話次第で出て来るものです。ただ好意を持つてお逢ひにならないではいけませんよ。」

院はこまごまと御注意をされた。院は御兩妻の間が平和であるやうに祈つておいでになるのである。餘りにたあいのない子供らしさを紫の女王に發見されることは、御自身としても恥づかしいことにお思ひになるのであるが、夫人が望んでゐることをとめるのも宜しくないとお考へになつたのである。

紫の女王は内親王である良人の一人の妻の所へ伺候することになつた自分を憐んだ。二十年同棲した自分より上の夫人は六條院にあつてはならないのであるが、少女時代から養はれて來たために、自分は輕侮してよいものと見られて、良人は高貴な新妻をお迎へしたものであらうと思ふと寂しかつた。手習ひに字を書く時も、棄婦の歌、閨怨の歌が多く筆に上ることによつて、自分はいかうした物思ひをしてゐるのかと自ら驚く女王であつた。院は自室の方へお歸りになつた。あちらで女三の宮、桐壺の方などを御覽になつて、それぞれ異つた美貌に目を樂しませておいでになつた後で、始終見馴れておいでになる夫人の美から受ける刺激は弱い筈で、それに比べて際立つ感じをお受けになることもなからうと思はれるが、なほ第一の嬪嬙たる美人はこれであると院はこの時驚歎しておいでになつた。氣高き、貴女らしさが十分備はつたりへに華やかで明るく愛嬌があつて、艶な姿の盛りと見えた。去年より今年は美しく昨日より今日が珍しく見えて、飽くことも見て倦むことも知らぬ人であつた。どうしてこんなに缺點なく生れた人だらうかと院はお思ひになつた。手習ひに書いた紙を夫人が硯の下へ隠したのを、院はお見つけになつて引出してお讀みになつた。字は専門家風に上手なのではなく、貴らしい美しさを多く含んだものである。

身に近く秋や來ぬらん見るままに青葉の山もうつろひにけり

と書かれてある所へ院のお目はとまつた。

水鳥の青羽は色も變らぬを萩の下こそけしきことなれ

など横へ書き添へておいでになつた。何かの場合ごとに今日の夫人の懊惱する心の端は見えても、さり氣なく抑へてゐる心持に院は感謝しておいでになるのであつた。今夜はどちらとも離れてゐてよいひまな時であつたから、臘月夜の君の二條邸へ院は微行でお出かけになつた。あるまじい事であるとお思ひ返しにならうとしても、抑へ切れぬお氣持があつたのである。

東宮の淑景舎の方は實母よりも紫夫人を慕つてゐた。美しく成人した繼娘を女王は眞實の親に變らぬ心で愛した。懷しく語り合つた後で中の戸を開けて、宮のお座敷へ行き、始めて女三の宮に御面會した。ただ少女とお見えになるだけの宮様に女王は好感が持たれて、軽い氣持にもなり年長の人らしく、保護者らしい風に物を云つて、宮の母君と自身の血のつづきを語らうとして、中納言の乳母といふのを傍へ呼んで云つた。

「逆上さかあがつて云ひますとさうなのですね。私の父の宮とお母様は御兄弟なのです。ですから勿體ないことです。が親しく思召して頂きたいと申し上げたかつたのですが、機會がございませんでね。これからはお心安く思召して、私共の住んで居ります方へもお遊びにおいで下さいまして、氣のつきませんことがございまして、御注意を頂けましたら嬉しく存じます。」
中納言の乳母が、

「お母様にもお死に別れになりますし、院の陛下は御出家を遊ばしますし、お一人ぼつちのお心細い宮様ですから、御親切なお言葉を頂きますことは、この上なく幸福に思召すかと存ぜられます。法皇様も宮様があなた様を御信賴遊ばして御保護の願へますやうにとの思召しがあり遊ばすらしく存じ上げました。私どももそのお言葉を承つてまゐつたのでございます。」

などと云つた。

「勿體ないお手紙をあちらから下さいました時から、どうかしてお力にならなければと心がけてはゐるのでございますが、何と申しても私が賢くなくて。」

と暖かい氣持を女王は見せて、姉が年少の妹に對する風で、宮のお氣に入りさうな繪の話をしたり、雛遊びはいつまでも止められないものであるとかいふことを若やかに語つてゐるのを、宮は御覽になつて、院のお言葉のやうに、若若しい氣立ての優しい人であると少女らしいお心にお思ひになり、打解けておしまひになつた。

これ以來手紙が通ふやうになつて、友情が二人の夫人の間に成長して行つた。書信でする遊び事もなされた。世間はかうした高貴な家庭の中のことを話題にしたがるもので、初め頃は、

「對の奥様は何と云つても以前ほどの御寵愛に逢つて居られなくなるであらう。少しは院の御愛情が薄らぐ筈だ。」
こんな風にも云つたものであるが、實際は以前に増して院がお愛しになる様子の見えることで、またそれについて宮へ

御同情を寄せるやうな口吻でなされる噂が傳へられたものであるが、こんな風に寢殿の宮も對の夫人も睦まじくなられたのであるからもう問題にしやうがないのであつた。

十月に紫夫人は院の四十の賀のために嵯峨の御堂で藥師佛の供養をすることになつた。大層になる事は院がとめておいでになつたから、目立たせない準備をしたのであつた。それでも佛像、經箱、經卷の包みなどの立派さは極樂も想像されるばかりである。さうした最勝王經、金剛般若經、壽命經などの讀まれる頼もしい賀の營みであつた。高官が多く參列した。御堂の邊りの嵯峨野の秋の眺めの美しさに半分は心が惹かれて集つた人なのであらうが、その日は霜枯の野原を通る馬や車を無數に見ることが出來た。盛んな誦經の申込みが各夫人からもあつた。二十三日が佛事の最後の日で、六條院は狭いまでに夫人等が集つて住んでゐるため、女王には自身だけの家のやうに思はれる二條の院で賀の饗宴を開くことにしてあつた。賀の席上で奉る院のお服類を始めとして當日用の仕度は總て紫夫人の手で調へられてゐるのであつたが、花散里夫人や、明石夫人なども分擔したいと云ひ出して手傳ひをした。二條の院の對の屋を今は女房等の部屋などにも使はせることにしてゐたのであるが、それを片づけて殿上役人、五位の官人、院づきの人人の接待所に當てた。寢殿の離れ座敷を式場にして、螺鈿の椅子を院の御ために設けてあつた。西の座敷に衣裳の卓を十二置き、夏冬の服、夜着などの積まれたそれらの上を紫の綾で覆ふてあるのも目に快かつた。中の品物の見えないのも感じがいいのである。椅子の前には置物の卓が二つあつて、支那の羅の裾ぼかしの覆ひがしてある。挿頭の臺は沈の木の飾り脚の物で、蒔繪の金の鳥が銀の枝にとまつてゐた。これは東宮の桐壺の方が受持つたので、明石夫人の手から調製されたものであるから極めて高雅であつた。御座の後の四つの屏風は式部卿の宮がお受持ちになつたもので、非常に立派なものであつた。繪は例の四季の風景であるが、泉や瀧の描き方に新しい味があつた。北側の壁に添つて置棚が二つ据ゑられ、小物の並べてある事は定つた形式である。南側の座敷に高官、左右の大臣、式部卿の宮を始めとして親王方の御席があつた。舞臺の左右に奏樂者の天幕が出來、庭の西と東には料理の箱詰が八十、纏頭用の品の入つた唐櫃を四十並べてあつた。午後二時に樂人達が參入した。萬歳樂、皇璽などが舞はれ、日の暮時に高麗樂の亂聲があつて、また續いて落蹲の舞はれたのも目馴れず珍しい見物であつたが、終りに近づいた時に、權中納言と、右衛門督が出て短い舞をした後で紅葉の中へ入つて行つたのを陪觀者は興味深く思つた。昔の朱雀院の行幸に青海波が絶妙の技であつたのを覚えてゐる人達は、源氏の君と當時の頭中將のやうにこの

若い二人の高官が勝れた後繼者として現れて來たことを云ひ、世間から尊敬されてゐることも、立派さも、美しさも昔の二人の貴公子に劣らず、官位などはその時の父君達以上にも進んでゐることなどを年齢までも數へながら語つて、やはり前生の善果がある家の子息達であると兩家を祝福した。六條院も涙ぐまれる程身にしむ追憶があまりになつた。夜になつて樂人達の退散して行く時に、紫の夫人づきの家職の長が下役達を従へて出て、纏頭品の箱から一つづつ出して皆へ頒つた。白の纏頭の服を皆が肩にかけて山際から池の岸を通つて行くのを遙かに見ては鶴の列かと思はれた。席上での音楽が始まつてまた面白い夜の宴になつた。樂器は東宮の御手から皆呈供されたのである。朱雀院からお譲られになつた琵琶、帝からお賜りになつた十三絃の琴などは六條院のためにお馴染の深い音色を出して、何につけても昔の宮廷が所思はれになる方であつたから、またさまざまの戀しい昔の夢をお描かせした。入道の宮がおいでになつたなら四十の御賀も自分が主催して行つたことであらう。今になつては何を志としてお見せする事が出來よう、總て不可能な事になつたと院は御歎息を遊ばした。女院をお失ひになつたことは何の上にも添ふ特殊な光の消えたことであると帝も寂しく思召すのであつて、せめて六條院だけを最高の地位に据ゑたいといふお望みも實現されないことを始終残念に思召す帝であつたが、今年は四十の賀に托して六條院へ行幸を遊ばされたい思召しであつた。しかしそれも冗費は國家のためお慎しみになるやうにと六條院からの御進言があつてお出來にならぬために口惜しく思召すばかりであつた。

十二月の二十日過ぎに中宮が宮中から退出しておいでになつて、六條院の四十歳の残りの日のための祈禱に、奈良の七太寺へ布四千反を頒つてお納めになつた。また京の四十寺へ絹四百疋を布施に遊ばされた。養父の院の深い愛を受けながら、お報いすることは何一つ出來なかつた自分と共に、御父の前皇太子、母御息所の感謝して居られる志も、せめてこの際に現ししたいと中宮は思召したのであるが、宮中からの賀の御沙汰を院が御辞退された後であつたから、大仰になる事は皆お廢めになつた。

「四十の賀といふものは、先例を考へますと、それがあつた後を猶長く生きて居られる人は少いのですから、今度は内輪の事にしてこの次の賀をして頂く場合にお志を受けませう。」

と六條院は云つておいでになつたのであるが、やはりこれは半公式の賀宴で派手になつた。六條院の中宮のお住居すまひの町の寢殿が式場になつてゐて、前にお受けになつた幾つかの賀の式に變らぬ行届いた設けがされてあつた。高官への纏頭は

お后の大饗宴の日の品品に準じて下された。親王方には特に女の装束、非参議の四位、殿上役人などには白い細長衣一領、それ以下へは巻いた絹を賜つた。院のために調へられた御衣服は限りもなく美事なもので、その外に國寶とされてゐる石帶、御劍を奉らせ給ふたのである。この二品などは宮の御父の前皇太子の御遺品で、歴史的なものだつたから院のお喜びは深かつた。古い時代の名器、美術品が皆集つたやうな賀宴になつたのであつた。昔の小説も贈物をするを最も善事のやうに書き立ててあるが、面倒で筆者には一書けない。

帝は六條院へ好意をお見せにならうとした賀宴をやむを得ず御中止になつた代りに、その頃病氣のため右大將を辭した人の後へ、中納言を俄かに拔擢してお据ゑになつた。院もお禮の御挨拶を遊ばされたが、それは、
「突然の御恩命は餘りに過分なお取扱ひで、若いかれが職に堪へますかどうか疑問に致して居ります。」

こんな謙遜なお言葉であつた。

帝はこの右大將を表面の主催者として院の四十の賀の最後の宴を北東の町の花散里夫人の住居に設けられた。派手になることを院は避けようとされたのであつたが、宮中の御内命によつて行はれるこの賀宴は、總て正式通りに略した所のない素晴らしいものになつた。幾つの宴席の料理の仕度などは内廷からされた。屯食の用意などはお指圖を受けて頭中將が皆したのである。親王お五方、左右の大臣、大納言二人、中納言三人、参議五人、これだけが参列して、御所の殿上役人、東宮、院の殿上人も殆ど皆集つて参つてゐた。院のお席の物、その室に備へられた道具類は太政大臣が聖旨を奉じて最高の技術者に製作させた物であつた、そしてお言葉を受けてこの大臣もお式の場合へ臨んだ。院はこれにもお驚きになつて恐縮の意を表されながら式の座へお着きになつた。中央の室に南面された院のお席に向きあつて太政大臣の座があつた。綺麗で、立派によく肥つてゐて、位人臣を極めた貫録の見える男盛りと見えた。院はまだ若い源氏の君とお見えになるのであつた。四つの屏風には帝の御筆蹟が貼られてあつた。薄地の支那綾に高雅な下繪のあるものである。四季の彩色繪よりもこのお屏風は立派に見えた。帝の御字は輝くばかりお美事で、目も眩むかと思ひなしも添つて思はれた。置物の臺、彈き物、吹き物の樂器は藏人所から給せられたのである。右大將の勢力も強大になつてゐたため今日の式の華やかさは勝れたものに思はれた。四十疋の馬が左馬寮、右馬寮、六衛府の官人等によつて次次に引かれて出た。畏れ多いお贈物である。そのうち夜になつた。例の萬歳樂、賀皇恩などといふ舞を、形式的にだけ舞はせた後で、お座敷の音楽の面白い場が開か

れた。太政大臣といふ音楽の達者が臨場してゐることにたれもたれも興奮してゐるのである。琵琶は例によつて兵部卿の宮、院は琴、太政大臣は和琴であつた。久しくお聞きにならぬせめか和琴の調べを絶妙のものとしてお聞きになる院は、御自身も琴を熱心にお弾き遊ばされたのである。如何なる時にも聞き得なかつた妙音も出た。またも昔の話が出て、子息の縁組その他のことで昔に増した濃い親戚關係を持つことにおなりになつた二人は、睦まじく酒杯をお重ねになつた。面白さも頂天に達した氣がされて、酔泣きをされるのもこの方であつた。お贈物には、勝れた名器の和琴を一つ、それに大臣の好む高麗笛を添へ、また紫檀の箱一つには唐本と日本の草書の書かれた本などを入れて、院は歸らうとする大臣の車へお積ませになつた。馬を院方の人が受取つた時に右馬寮の人人は高麗樂を奏した。大衛府の官人達への禪頭は大將が出した。質素に質素にして目立つことはお止めになつたのであるが、宮中、東宮、朱雀院、后の宮、この方方との關係が深くて、自然に華やかさの作られる六條院は、こんな際に最も光る家と見えた。院には大將だけがお一人息子で、外に男子のないことは寂しい氣もされる事であつたが、その一人の子が萬人に勝れた器量を持ち、君主の御覺えがめでたく、幸運の人といふに外ならぬ事が證しされて行くにつけて、この人の母である夫人と、伊勢の御息所との双方の自尊心が強く苦しく競ひあつた時代に次いで、中宮とこの大將が双方とも、院の大きい愛の下で立派な方方になれたことが思はせられる。この日大將から院へ奉つた衣服類は花散里夫人が引受けて作つたのである。纏頭の物は皆三條の若夫人の手で出来たやうであつた。六條院の華やかな催しごとにもよそのことに聞いてゐた花散里夫人には、かうした生きがひのある働きをする日はあることかと思はれたものであるが、大將の母儀になつてゐることによつて光榮が分たれたのである。

新年になつた。六條院では淑景舎の方の産期が近づいたために不斷の訢經が元日から始められてゐた。諸社、諸寺でも數知れぬ祈禱をさせておいでになるのである。院は昔の葵夫人が出産の後で死んだことで懲りておいでになつて、恐ろしいものと子を生むことを感じておいでになり、紫夫人に出産のなかつたことは物足らぬお氣持もしながらまた嬉しくお思はれになるのであつたから、まだ少女といつてよい程の身體で、その女の大厄を突破せねばならぬ御女の事を、早くから御心配になつてゐたが、二月頃からは寢ついてしまふ程にも苦しくなつた風であるのを院も女王も不安がられないはずもない。陰陽師どもは場所を變へて謹慎をせねばならぬと進言するので、院外の離れた家へ移すのは氣がかりに思召され、明石夫人の北の町の一つの對の屋へ淑景舎の病室は移されることになつた。こちらはただ大きい對の屋が二つと、その外

は廊にして廻らせた座敷ばかりの建物であつたから、廊座敷に祈禱の壇が幾つも築かれ、評判のよい祈禱僧は皆集められて祈つてゐた。明石夫人は桐壺の方が平かに出産されるか否かで自身の運命も決ることと信じてゐて、一所懸命な看護をしてゐた。明石入道の尼夫人はもう呆けた老婆になつてゐるはずである。姫君に接近の出来ることを夢のやうな幸福と思つて、移つて間もなくこの人が傍へ出て来るやうになつた。もう幾年か明石夫人は姫君につき添つてゐるのであるが、桐壺の方の生れて來た當時の事情などはまだ正確に話してなかつた。それを老尼は嬉しさの餘りに病室へ來ては涙まじりに、昔の話を身振ひをしながら姫君へ語るのであつた。初めの間は無氣味な老婆であると姫君は思つて、顔ばかり見つめてゐるのを常としたが、實母にさうした母親があるといふことは何かの時に聞いたこともあつたのを思ひ出してからは好意を持つやうになつた。明石で生れた時のこと、また院がその海岸へ移つて來ておいでになつた頃の様子などを尼君は云ふ、「京へお歸りになりました時、一家の者はこれで御縁が切れてしまふのかとひどく悲しんだものでございますがね、お生れになつたお姫様が暗い運命から私達を救ひ上げて下さつたのでございますから、有りがたいことと御恩を思つて居ります。」

はらはらと涙をこぼしてゐる。そんな哀れな昔の話をこの尼さんが聞かせてくれなければ、自分はただ疑つて見るだけで、真相は何もわからずにしまつたかも知れぬと思つて桐壺の方は泣いた。心の中では、自分の身の上は決して缺目ないものとは云へなかつたのを、養母の夫人の愛に磨かれて十分な尊敬も受ける院の御女ともなり得たのである、思ひ上つた心で東宮の後宮に侍してゐても、他の人達を自分に劣つたもののやうに見たりして來たのは過失である、表面に出して云はないでも、世間の人は自分のその態度を譏つたことであらうと反省もされるやうになつた。實母は少し劣つた家の出であるとは知つてゐても、生れたのはさうした遠い田舎の家であつたなどとは思ひも寄らぬことだつたのである。大やうに育てられ過ぎたせめだつたかも知れぬが、自身の今まで知らぬとは思議なことやうに思はれるのであつた。祖父である入道が現在では人間離れのした仙人のやうな生活をしてゐるといふことも若い心には悲しかつた。姫君が俄かにいろいろな物思ひを胸に持つて、寂しい顔をしてゐる時に明石夫人が出て來た。晝の加持にあちらこちらから手傳ひの者や僧が來て騒いでゐるのを、この人は今まで監督してゐたのであるが、來て見ると姫君の傍には他の者がゐるに尼君だけが得意な氣分を見せて近く坐つてゐた。

「體裁が悪うございますよ。短い几帳で身體をお隠しになつておつきしていraftしやればいいのに、風が吹いてゐますからお座敷の外から人が覗けば、あなたはお醫者のやうな恰好でお傍に出てゐるのですから恥づかしい。こんな風にしておいでになつてはね。」

などと明石は片腹痛がつてゐた。品のよいとりなしでかうしてゐるのであると尼君自身は信じてゐるのであるが、もう耳も餘り聞えなくて、娘の言葉も、

「ああ宜しいよ。」

などと云つていい加減に聞いてゐるのである。六十五六である。しやんとした尼姿で上品ではあるが、目を赤く泣き腫らしてゐるのを見ては、古い時代、つまり源氏の君の明石の濱を去つた頃によくかうであつたことが思ひ出されて夫人ははつとした。

「間違ひの多い昔話などを申してゐたのでせう。怪しくなりました記憶から取出します話には荒唐無稽な夢のやうなこともあるのでございますよ。」

と、微笑を作りながら夫人の眺める姫君は、艶に綺麗な顔をしてゐて、しかも平生よりは減入つた風が見えた。自身の子ながらも勿體なく思はれるこの人の心を、傷つけるやうな話を自身の母がして煩悶をしてゐるのではないか、お後の位にもこの人の上る時を待つて過去の眞實を知らせようとしてゐたのであるが、現在はまだ若いこの人でも、昔話から母の自分を疎ましく思ふことはあるまいが、この人自身の悲觀することにはならうと明石夫人は憐んだ。加持が濟んで僧達の方去つた後で、夫人は近く寄つて菓子などを勧め、

「少しでも召し上れ。」

と心苦しい風に姫君を扱つてゐた。尼君は立派な美しい桐壺の方に視線をやつては感激の涙を流してゐた。顔全體に笑みを作つて、口は見苦しく大きくなつてゐるが、目は流れ出す涙で悲しい相になつてゐた。困るといふやうに明石は目くばせをするが、氣のつかない風をしてゐる。

「老いの波かひある浦に立ちいでてしほたるるあまをたれか咎めん

昔の聖代にも老齡者は罪されないことになつてゐたのでございますよ。」

と尼君は云つた。硯箱に入れてあつた紙に、

しほたるるあまを波路のしるべにて尋ねも見ばや濱の苦屋を
こんな歌を姫君は書いた。明石も堪へ難くなつて泣いた。

世を捨てて明石の浦に住む人も心の闇は晴るけしもせじ

などと云つて、この場の悲しい空氣の密度をより濃くすまいとした。姫君は祖父に別れた朝のことなどを、心には忘れてゐても、夢の中だけでも見たいのが見えぬのは残念であると思つた。

三月の十幾日に桐壺の方は安産した。その時までは危いことのやうにして、多くの祈禱が神佛に捧げられてゐたのであるが、大した苦しみもなく、しかも男宮をお生みしたのであつたから、この上の幸福もないやうで院のお心も落ちついた。こちらは蔭の場所のやうになつてゐた所で、ただ風流な座敷が幾つも作られてある建物では、いかめしい今後つづいてあるはずの産養ひの式などに不便であつて、老尼君のためにだけは嬉しいことと見えても、外間へは不都合であるために、南の町へ産屋を移す計畫が出来てゐた。紫の女王も出て來た。白い服裝をして母らしく若宮をお抱きしてゐる姫君は可愛ゆく見えた。紫夫人は自身に経験のないことであつたじ、他の人の場合にもかうした産屋などに立合つたことはなかつたから、幼い宮を珍しく可愛ゆく思ふ風が見えた。まだ危いやうに思はれる程の小さい方を女王は始終手に抱いてゐるので、ほんたうの祖母である明石夫人は、養祖母に任せ切りにして、産湯の仕度などにばかりかかつてゐた。東宮宣下の際の宣旨拜受の役を勤めた典侍がお湯をお使はせるのであつた。迎へ湯を盥へ注ぎ入れる役を明石の勤めるのも氣の毒で淑景舎の方の生母がこの人であることは知らないこともない東宮方の女房達は目をとめて、どこかに缺點でもある人なら當然のこととも思つて居られようが、餘りに氣高い明石の姿はこの人達に畏敬の念を起させて、未來の天子の御外祖母たる因縁を身に備へて生れた人に違ひないといふやうなことも思はせた。お湯殿の式のくはしい記事は省略する。

六日目に以前の南の町の御殿へ桐壺の方は移つた。七日の夜には宮中からのお産養ひがあつた。朱雀院が世捨人の御境遇へお入りになつたために、そのお代りに遊ばされたことであつたらしい。宮中から頭の辨が宣旨で來て、この日の派手な祝宴を管理した。纏頭の品品は中宮の御志で慣例以上の物が出された。親王方、諸大臣家からもわれもわれもと華やかな御祝品の來るお産屋であつた。この際の祝宴については、いつも華奢に流れる事は遠慮したいとお云ひになる院も、餘

りお止めにならなかつたために、目も眩む程のお産養ひの日がつづき、ぼんやりとしてゐた筆者にその際の洗煉された細かな物好みで製作された各各の式の賀品等のことによく氣がつかなかつた。

院は若宮をお抱きになつて、

「大將が幾人も持つた子を今迄見せないのを恨めしく思つてゐたが、こんな可愛ゆい方が授かつた。」

と愛しておいでになるのはごもつともなことである。毎日物が引き伸ばされるやうに若宮は大きくお成りになるのであつた。乳母などは新しい人をお見つけになることは當分されずに、これまでの六條院の女房の中から、身柄も性質もよい人ばかりを選んでおつけになつた。明石夫人が聰明で、氣高い、大やうな心を持つてゐながら、或る場合に卑下することをお忘れずに、自身が表に出ようとするのではない態度の取れることについては褒めない人はなかつた。紫夫人は顔を顯はに見せて話すやうなことは今迄この人となかつたのであるが、今度はよく睦まじく話して、過去に於ては長く僭越な競争者であるとしてゐた人に好意を持ち得るやうになり、若宮を愛する氣持の交流が暖かい友情までも覺えさすことになつた。女王は子供好きであつたから、天兒あまごの人形などを自身で縫つたりしてゐる時は殊更若しく見えた。日夜を若宮のため心を使ふ紫夫人であつた。明石の老尼は、若宮を満足出来る程拜見することの出来ないのを残念に思つてゐた。しかしそれが却つて幸ひであつたかも知れぬ、なほ暫くでもお傍でお愛し申し上げるやうな時間が許されたものであれば、後の戀しい思ひで尼は死んだかも知れないから。

明石の入道も姫君の出産の報を得て、人間離れのした心にも非常に嬉しく思はれて、

「もうこれでこの世と別な境地へ自分の心をおくことが出来る。」

と弟子どもに云ひ、明石の邸宅を寺にし、近くの領地は寺領につけて以前から播磨の奥の郡に人も通ひ難い深い山のあつた山を草庵へ、もう今後の子孫の運は佛神にお頼みするばかりであるとして入道は行つてしまふのであつた。近年はもう京の家族も順調に行つてゐることに安心して、使を出して見ることもなかつたのである。京から使が送られた時にだけ短い通信を尼君へ書いて來た。入道はいよいよ明石を立つ時に、娘の明石夫人へ手紙を書いた。

この幾年間はあなたと同じ世界にゐながら既に他界で生存するもののやうな氣持で大したことはない限りはお便りを聞